論文

戦後キリスト教教育と湯浅八郎

辻　　直　人

はじめに

生活は創作である。創作は生活である。
善に潔められ　美に恵まれ　真に培われた一生を
神と人とに捧げつくす所に幸福がある。
一九四八年五月五日　　八郎

約８年もの海外生活を終えて，湯浅八郎（1890-1981）は1946年10月にアメリカから帰国した。その後の足跡を見てみると，1947年４月より二度目の同志社総長に就任する一方で，同年３月に設置認可された新島学園の初代理事長・校長を務め（校長は1949年まで，理事長は1981年まで），更に1950年からは国際基督教大学の初代学長にも就任している（1962年まで。その後は理事長も務める）。また，1955年から61年まではキリスト教学校教育同盟（以下，「教育同盟」と略記）第18代理事長を務め，機構改革などに取り組んだ。このように，戦後帰国してからの湯浅は一貫してキリスト教学校で中心的な役割を果たしていたことが分かる。

湯浅は既に1935年から37年にかけても同志社第10代総長を務めていたが，右派教職員や学生との対立により，任期半ばで辞任に追い込まれた(1)。戦後になって再び要職に戻ってきた湯浅は，戦後の新しい体制の

中で，どのような教育を目指したのだろうか。湯浅八郎が戦後推進したキリスト教教育の実態と彼の教育観について，本稿で検討してみたい。

これまでの湯浅八郎研究や関連文献では，それぞれの学校に関わる部分しか取り上げておらず，そこを貫くキリスト教教育への姿勢や思想の一貫性についての検討はなされてこなかった。例えば武田清子『湯浅八郎と二十世紀』（教文館）は，戦後の教育活動については国際基督教大学のことしか触れておらず，その他の学校や教育同盟に関することについては全く触れられていない。同様に，『新島学園四〇年の歩み』『新島学園五〇年の歩み』では当然ながら新島学園における湯浅八郎しか触れておらず，その他の活動については目を配っていない。

本稿では，数々のキリスト教学校及び教育同盟で見られた言動の特徴を分析しつつ，そこを貫く湯浅の教育思想について考察したい。また，戦前アメリカで獲得したキリスト教国際主義の思想は戦後の活動でどうなったのか。戦後の活動と，戦前戦中の活動や思想とのつながりはどうなっているのか。キリスト教教育を通して何を目指したのか，検討することを目的とする。

さて，冒頭に紹介した短文は，湯浅家が1832（天保３）年以来，上州安中で代々営む醤油醸造会社「有田屋」の芳名帳に残された一文である。帰国後間もない湯浅八郎がしたためたこの文章には，湯浅が戦後の人生で目指した生き方が凝縮されているように思われる。

この文章が書かれた1948年５月５日は，新島学園創立第一回開校記念日式典が安中教会で行われており，湯浅八郎は「民主日本の教育」という題で講演を行っている[(2)]。更に前日の５月４日にも，安中高等女学校講堂での新島学園開校記念講演会において「世界と日本」という題で講演をし「一時間半の感銘深い大雄弁にて満堂の聴衆を魅了」した[(3)]。この時，同志社顧問ルース・イザベル・シーベリー（Ruth Isabel

Seabury）も同行し，講演会で「新島先生を尊敬していること，日本にきた使命など」を聴衆に語っている。新しい時代に見合った教育を始めるにあたり，どのような思いを湯浅は念頭に置いて語ったのだろうか。残念ながら，この時の講演録あるいは草稿は管見の限り残っていない。しかし，講演日に書かれた冒頭の文章は，戦後新教育にかける湯浅の願いが込められていると考えられる。

「創作」とは自由な発想ということだろう。「生活」そのものが自由に作られるべきであり，自由に生きられることが「生活」なのだ，という意味ではないだろうか。この短い文章の中に，新時代への期待を彷彿させる。

後段の「善」「美」「真」は，ギリシャ哲学以来大事にされてきた価値観である。湯浅がこの一文の発想をどこから得たのかは，分からない。しかし，哲学にせよ宗教にせよ，自由教育にせよ，依拠する信念がある。真善美に囲まれた生涯を神と人に捧げつくすことこそ幸せである，と述べている。この真意にも，考察を進めながら，迫ってみたい。

1. 同志社総長への復帰

「1945年戦争が終わった一年後，私は戦争中アメリカに滞留した日本市民帰国者第一号とし1946年10月日本に帰りました」(4)。湯浅が言うに，民間人では最初の帰国者だそうだ。軍用船に便乗させてもらい，10月15日に横浜に到着した。

帰国して最初にしたことは，ユネスコへの賛同だった。「世界を敵と見ていた日本，軍国主義の帝国日本が，歴史の裁きを受けて，いままた新しい日本をつくるという課題を持っている時に，どうしたら世界を友と見ることができるだろうか」(5)，と考えた湯浅は，戦中に肌で感じ学んだキリスト教を土台とした国際平和を目指すよりも，新しく作られたユ

ネスコの精神を日本に持ち込み広めようとしたのであった。湯浅によれば，1946年8月にニューヨークでユネスコ事務所が開設され[6]，そこでユネスコに関する資料をもらい，京都の自宅に帰る前に，その資料を時の総理大臣片山哲に渡したという。

翌1947年4月，湯浅は同志社総長に再び招かれた。同志社大学としては「敗戦後の出直しにさいし，深い反省をこめて湯浅前総長を再び総長に迎える決意をし」，「学生大会もまた湯浅八郎博士を総長に，という決議をした」[7]。湯浅が選ばれた理由として「当時はなお米軍の占領下であり，アメリカに対して顔のきく総長をもつことは有利であるとする考え方が働いたこともまた否定できない」と『同志社百年史』は説明している[8]。湯浅は同志社史上唯一の，総長に二度選ばれた人物である。ただし，二度とも任期途中で辞任している。湯浅総長に課せられた主たる課題は「同志社を申請大学として出発させること」「同志社の精神的復興をはかること」「同志社の経営的基盤をかためること」の三つだった。

湯浅は頻繁に「同志社の精神的遺産」として「新島襄先生」「キリスト教主義」「国際主義」「民主主義」の4つの精神的遺産こそが同志社教育の重要な資源であると訴えていた。湯浅は「同志社は三流大学である（中略）しかしこの四資源があるおかげで，同志社はその輝かしい歴史と伝統をうけついで，世界に貢献できる教育機関たらしめることができる」と主張していた[9]。そして，同志社の精神的復興をはかるために，湯浅が戦時下のアメリカで世話になったルース・イザベル・シーベリーを同志社顧問として招聘し，宗教教育の在り方について指導を仰いだ。

1948（昭和23）年に来日したシーベリーはアメリカン・ボード教育部長を務め，「生まれながらの国際人（an internationalist by instinct）」と呼ばれていた[10]。組合派に限らず教会や教派を超えた数々の集会，その対象も専門的なビジネス業界の男女，若者，信徒あるいは教職者，学生向けなど全米の様々な集会に参加した人物である。湯浅も，シーベリー

の国際人としての振舞い方に学ぶものが多かったであろう。

シーベリーは同志社大学で，学生の課外の宗教活動を奨励した。その勧めによって月一度のコーヒーアワーが始まることとなった。この活動が定着し，オーテス・ケーリ（Otis Cary）教務部長（レジストラー）により新制大学の時間割が作成される際，チャペルアワーとアッセンブリーアワーが時間割内に繰り入れられることになった[11]。

シーベリーの日本での活動期間は1年余りで，「秋より始まる米国教会に於ける日本研究に備えて各地に講演のため七月中旬帰米されることにな」った[12]。1949（昭和24）年7月6日の送別会後帰国したが，帰国後間もなくして，ミシガン州マスキーゴン（Muskegon）で気管支喘息の悪化により，シーベリーは急逝してしまう。湯浅は彼女の遺志を受け継ぎ，同志社をはじめとするキリスト教学校に，キリスト教国際主義精神の浸透を目指していった。

総長の間，同志社大学の新制大学への改組と同時に，女子大学の創設にも力を注いだ。湯浅はこの点について「戦後のあの空白時代の日本では，男女共学の大学に自分の娘を入学させるなんてことは，なかなか思い切れない人が相当ありました。ですから，考えてみると，やはり，女子大学の使命というのがあるわけなんです」と回想している[13]。

更に国際交流の復活を目指して，新島襄の出身校アーモスト大学卒業生のオーテス・ケーリが1947年9月に来日し，同志社アーモスト館館長に就任して，寮生の指導にあたった。ケーリは初代教務部長としての働きもしている。また，ケーリは「米国文化史」や「現代欧米文明の諸相」を担当し，日米相互の理解を深める働きをした。こうして，同志社の掲げる国際主義育成の教育が戦後すぐに始められている[14]。

しかし1950年4月，学内刷新運動（職員による公金の使い込みが発覚し，職員を刷新するように起きた運動）が起きた頃に「国際基督教大学設立のために渡米している湯浅総長に対しても非難の声があが」り，湯

浅からはアメリカから辞表が届いて，同志社を去ることとなった[15]。

2. 国際基督教大学初代学長への就任

(1) 国際基督教大学創設までの動きと学長就任

国際基督教大学（ICU）初代学長には，1950年6月から就任している。1953年4月に開学するまでの間はアメリカにも渡り，大学開学のための支援を取り付けるための活動をしており，同志社総長時代も既に大学新設のためにアメリカに渡っていたことは既に触れた。

何故湯浅が学長に選ばれたのか。国際基督教大学は最初，国際基督教大学研究所として発足した（1948年）。キリスト教主義大学の創設は戦前からの悲願だったことは既に紹介されている[16]。1910年頃に井深梶之助を中心とした議論が起き，1933年以降には田川大吉郎らがこの議論を引き継いでいるが，湯浅はその議論の最中の1936年9月に「日本基督教学術研究所（案）」を作成している[17]。この時期，日米のキリスト教教育関係者で組織された日米合同委員会によるキリスト教学校教育調査が1928年に行われて以降，1933年に国際教育委員会と改組され，同委員会日本部は同年1月に第1回委員会を開催して，「合同キリスト教大学設立と神学校合同の実現を積極的に推進したい」[18]という方向性を示していた。

この委員会には，元々同志社総長大工原銀太郎が委員を務めていたが，大工原が急死したため，代わりに湯浅が入ることとなったのである。1935年3月にはYMCA総主事J.R.モット（John R. Mott）が来日し，日本の教会関係者やキリスト教学校関係者と懇談し，その場でもキリスト教主義大学の創設について話し合われ，その後も継続審議された。同年7月には国際教育常務委員会で単科大学及び研究所の2案を作成することになり，単科大学案は田川大吉郎と山本忠興が，研究所案は上述の通

り湯浅が作成を担当することとなり，湯浅は上述の「日本基督教学術研究所（案）」を1936年9月に提出したのだった。同案は英訳され米国部会にも送付されている[19]。湯浅の案がアメリカ側にどれほど伝わったかは不明だが，湯浅が戦前の同志社総長時代よりキリスト教主義の高等教育機関を作ることには意欲的だったことが分かる。

1945年10月，4人のキリスト教関係者が来日した。日本基督教協議会主事都田恒太郎の呼びかけで来日したメンバーは，元フェリス女学校長で北米外国宣教協議会日本委員会委員長のルーマン・シェーファー（Luman Shafer），北米教会連盟協議会理事ウォルター・ヴァン・カーク（Walter Van Kirk），国際宣教協議会議長ジェームス・ベイカー（James Baker），牧師ダグラス・ホートン（Douglas Horton）だった。湯浅は2度目の滞米中の1939年に直接ホートンと出会い，会衆派教会のエキュメニカル運動に直接触れる機会を得ている[20]。4人は東京女子大学理事会小委員会（メンバーは山本忠興東京女子大学理事長，斎藤惣一日本YMCA主事，矢野貫城明治学院長，都留仙次フェリス女学校長，安井哲東京女子大学前学長，石原謙東京女子大学長の6名）に特別参加し，日本のキリスト教学校の現状と課題を知ることとなった。この時の日本側の委員は東京女子大学の学問的水準の向上と新しいキリスト教主義大学設立について話し合っていたが，帰国後「使節団の帰国報告で特に強調されたのは，基督教大学の創設に関する切実な要望のほう」だった[21]。

一方，1946年の時点で，湯浅は新しい大学の在り方についてブランボー（Thoburn T. Brumbaugh，メソジストの在日宣教師経験者）らと話し合っている。恐らく，直接面識のあったホートンらから推薦があったのではなかろうか。1946年8月1日に「ニューヨークでやがてICUという形をとることとなる新しい大学の設立にアメリカ側から七つのミッション・ボードの支持のもとにつくられた事務局の責任者」であったブ

ランボーとオールブライト（Leland Albright，カナダキリスト教団の元在日宣教師）が湯浅を訪れて，未来の大学について意見を聞いていた。

武田清子によれば，その時の話し合いで，「湯浅は，慎重に考察して書いてきた文書をもって，彼が望ましいと考える大学の構想を示したが，これが，その後，日米双方において，この大学設立を推進しようとする人々の考えの基本的土台になった」[22]と言われている。この時はまだ具体的な計画がまとまっていたわけではなく，湯浅自身が新しい大学の教育と経営にかかわるとは考えてもいなかっただろう。ただし，ブランボーらに示した文書からも分かるように，湯浅自身はしっかりとした将来の「大学構想」案を持っていた。その「大学構想」は武田清子『未来をきり拓く大学―国際基督教大学五十年の理念と軌跡』27-28頁及び『国際基督教大学創立史』35-36頁に掲載されている。全13項目にわたる内容は，戦後の大学教育への期待と理想が込められていた。そのうち，国際性に関わる部分を以下引用する。

> 新しい事業であること。依存の学校を助ける必要から生じた折衷物であってはならない。……（a）国際的で，（b）異人種，（c）異文化が交流する，（d）男女共学の大学であること。アメリカ人はこれらの新しい考えを提案し，強く助言することはできるが，アメリカ式の学校を押しつけてはならない。
>
> 純粋，かつ，明確にキリスト教的大学でなければならないが，世界的で，エキュメニカルで，特定の教派に属するものであってはならない[23]。

ここで引用した最初の主張は，湯浅がイリノイ大学で実際に経験した国際的な交流の豊かさから来るものだろう。自らイリノイ大学でYMCAでの活動を通じて人種や国籍を超えた交わりの大切さを，日本でこれから生まれるかもしれない新しい大学内で実現しようと考えていた。また，留学中及び戦時中のアメリカで経験した，キリスト教的世界

共通の価値観によってつながり合うことを目指したと言えるだろう。ここに湯浅の目指した大学像，キリスト教教育観がある。

(2) ICUで目指した教育

先にも述べたように，日本において一流のキリスト教主義大学を創ろうとした動きは戦前期の50年も前からあった。戦前の計画は東京大学に匹敵するような大学を創立することだった。しかし，敗戦後，新しい時代に見合う構想内容や教育目的を実現しようとしてICUを設立したと言う。湯浅はICU開学1年後に，大学の目指す目的を次のように語っている。

> 時代的感覚とは，過去の日本が不幸にして世界を敵とした世界観に立って，国家の将来，したがって青年の教育を考えたのに対して，今後の日本は世界を友とすべきと教えるものである。日本の新教育は，世界の友たるにふさわしい内容と方法とを持つものでなければならない。ICUはまさにこの点に関して，最も敏感な，真摯な理解と決意とを持つ大学であろうとするものである。（中略）ICUがあえて「国際」と称する所以はここにあるのである[24]。

単に知識と技術の修得を目的とするのでなく，得られた知識と技術が何のために用いられるべきか，「人生の目的，人間の意義，価値批判の基準などの根本的な問題について基督教的な見地からこれらの命題を採りあげるのが本学の本質」とも述べている[25]。このような発想から，専門課程にこだわるのではなく，リベラルアーツ教育を全面に掲げた教育課程を組織することになった。

ICUでは，入学式において，入学生たちは「世界人権宣言」へ署名することで入学が認められる。その際，「国際基督教大学の学生として本学の理想との実現のために世界人権宣言の原則に立ち，法を尊び，学則

ならびに指示に従うことを，入学にさいし，ここに厳粛に宣誓します」という誓いを立てる[26]。ここでは，敢えてキリスト教色を出さずに，普遍的な人権という概念を掲げることで，あらゆる人種が平等であることを実現するための国際大学が目指されていると言えるだろう。

以上，ICUは国際主義をまず第一に掲げ，その土台がキリスト教に根差している大学を目指して創設されたのだった。ここには，湯浅の戦前よりの思想がそのまま息づいていると言える。

3. 新島学園の開学と初代理事長・学園長への就任

湯浅は国際基督教大学だけでなく，新島学園の創設にも大きく関与している。戦後のキリスト教学校2校の開学に関わったことになる。

群馬県安中市に1947年，湯浅正次が郷土の先人新島襄のキリスト教精神を土台とした学校教育を始めようと開学したのが新島学園だった。正次は安中で代々湯浅家が経営している有田屋の当主であり，新しい時代に見合ったキリスト教学校設立を目指した。その設立に叔父の八郎が協力し，八郎は初代理事長兼校長に就任した。しかし，実際当時は同志社との兼務であったため，安中教会の江川栄牧師が校長事務取扱を務めている。校長は1949年5月で二代目柏木隼雄に交代しているが，理事長は亡くなる1981年まで務めていた。

実際には同志社に続いてICUの開学と時期を一にしており，それほど新島学園の教育活動や運営に強く関与したわけではないようではある。しかし，湯浅の意向が学園の方針に強く反映されていると考えられる。

新島襄の精神を基調としている点で同志社とは強いつながりが必然的に生まれ，同志社の教育方針と重なるところがある。新島学園は創設時の1947年4月，次のような教育五原則を採択した。

1．キリスト教精神を教育の基とする。
1．１人１人の生徒を愛し，その人格を重んずる。
1．知識水準を高くし，勉学の喜びを教える。
1．勤労を尊び，天然資源の利用を学ぶ。
1．己れを知り，国を愛し，隣人に仕え，世界を友とする心を養う。

この「五原則」については「空洞化している」「再考すべき」という指摘もあったが[27]，「キリスト教精神に基づき，自由で敬虔な人格，国際的教養，民主的社会人としての良識をもち，神と人とに奉仕する人材の育成」[28]を目指して教育が行われてきた。同志社の掲げた「新島襄先生」「キリスト教主義」「国際主義」「民主主義」の４つの精神的遺産がそのまま新島学園の教育方針にも当てはまっているのである。

1948年４月18日の総教師会の席で，湯浅八郎は教職員に以下のように語った。

在米中，学園設立の話を聞き非常な霊感に打たれた。友人から同志社をやめて学園へ行けともいわれた。自分としても生まれ出ずる学園の為に力を尽くしたい考えであった。しかしそれは現実として許されなかった。今までのところ皆さんに委ね，皆さんの努力を感謝してきたが，今ここに全てを見聞きし，言われぬ喜びと感謝の念をもっている。六・三制は制度の切り替えではなく，教育内容・精神の切り替えであることを了解していただきたい。教職員についても，教員組合なくば生活の安定の保障が得られぬとすれば，これは理事側の責任であると思う。組合に加入せざる新島学園において最善を尽くし，よき成果を上げ他の模範としたいものである。この時代にあってよき教職員を持ち得ることは大いなる喜びであり，今後の御精進を願ってやまない。

教育においては世界の市民としての高い人間性を持つ人材を育て，国際的

視野の広い，正しい心の持主を生み出す新島先生の理想を具現する新学園を育て上げたいと思う[29]。

この発言においても，世界市民としての国際的視野が強調されているように，この思想は戦前から貫かれていたものだった。

また，新時代にあたり，単なる制度の切り替えでなく，「教育内容・精神の切り替え」であることを強調している点からは，戦後キリスト教教育への意気込みを感じられる。

4. 基督教学校教育同盟理事長として

(1) 機構改革

1955年10月，第43回基督教教育同盟会総会（西南学院）で，湯浅八郎は理事長に選ばれ，1961（昭和36）年6月の第49回総会で大木金次郎に交代するまでの5年半，理事長を務めた。その後も顧問という立場で教育同盟に関わっている。50年代後半は，教育同盟にとっては機構改革を進める大事な時期であった。ここでは，教育同盟における湯浅の働きについて，見ていこう。

在任期間中に，日本のキリスト教界はJ.C.ヘボンをはじめとするプロテスタント宣教師が来日して以来の宣教百年記念の年を迎えている。そのことに合わせた教育同盟機関紙『キリスト教学校教育』第27号（通算第121号，1959年11月1日発行）の巻頭に，「宣教百年を迎えて」という記事を寄せている。湯浅はキリスト教が日本に伝えられて記念すべき年に，「キリストの真理に基づく人間観を人間形成の根本理念とすること」「個人の自重性にめざめた社会人が互いに融和協力して，その共〔生？〕社会的責任を分かち果たすこと」をキリスト教教育は目指すべきであると訴えた。人間形成の根本にキリスト教を据えることは，湯浅本

人がアメリカ留学時代で強く自覚してきたことである。

更に続けて，教育者については次のように述べている。

> キリスト教主義教育者の責務は，自由にして敬虔なる学風を樹立することであり，教育に研究に奉仕に最善をつくして万全を期することであり，その実績に基づく実力の基盤に立って常に私学の理想と権威とを高揚することであると信ずる。

ここで，民主主義社会において，キリスト教学校は自由で敬虔な学風であるべきであると捉えており，私学の理想と権威を高めるような働きをするように訴えているのである。この発想は，戦前に同志社総長就任式での式辞「私は同志社学園に，自由にして敬虔なる学風の樹立を提唱し，これを熱求して止まぬ者であります」(30) という文言との共通性が見られる。つまり，戦前から湯浅にとっては一貫した教育観を有していたと言えるだろう。

湯浅理事長在任中の大きな動きとしては，基督教教育同盟から基督教学校教育同盟への名称変更及び機構変革があった。湯浅は，「従来同盟会は主として加盟校間の連絡，親睦に努め」てきたが，今後は加盟校同士の単なる親睦団体ではなく，「対外的には我が国の教育国策に関して，基督教主義教育者の立場から緊急妥当な権威ある発言をなす準備を進めること」，「対内的にはキリスト教主義学校の第一義的存在理由である基督教主義教育の本質を発揮するに必要な教育原理と方法とに関して徹底的に研究を進めること」が時代から求められていると考えていた(31)。そして，その視点にのっとって名称変更及び機構改革を進めることになったのである。

第49回総会（1961年6月，関東学院大学）初日開会式の挨拶で湯浅は「本同盟の機構のもつ使命を充分に検討し，改革すべきものは改革し更

に強化して互いに与えられた使命を完うするため進みたい。」と述べている[32]。この総会で教育同盟の「性格の検討」の提案がなされ，同年9月には性格検討委員会が組織された。その中で，組織や総主事の職務の権限，相互扶助の効果を高めるための法人化などが話し合われた。

また，1956年の第44回総会（立教学院）で新たに「基督教学校教育同盟規約」が成立し，下部組織として各地区協議会（東北北海道，関東，関西，西南）及び教育研究委員会を設置することが決まった。また，教育研究委員会の中に広報委員会を設置することになった。このことについて湯浅は，世界的傾向として「マス・コミュニケーションの発達普及により，民衆の意志の疎通と相互理解とが上下に広められ深められ」「相互のかかわり合い，すなわち協同体制が（中略）社会の在り方を規制し，その文明の方向付けを決定しつつある」中，教育同盟においても「本同盟の根本課題である教育研究に関して広報活動を展開」することを期待している[33]。

このように，委員会組織や地区協議会の組織づくりにより，全国でキリスト教教育の研究と発展，更には広報活動の展開を目指すように機構改革が進められたのである。

(2) 教育課程改訂への対応

湯浅は単に機構の改革を推進しただけでない。より踏み込んで，教育課程や教科内容にも踏み込んでの議論を教育同盟内に浸透させた。第46回総会（1958年5月，北陸学院）初日開会式で，湯浅理事長は以下のような挨拶をしている。

> 本同盟の諸学校の代表者が絶対者の像をえがきつつ，今日茲に集まり吾ら何をなすべきかに先立って，吾ら如何にあるべきかとキリスト教主義学校は反省をせまられている。道徳教育や科学教育が問題化している時，共に集ま

り共に祈り共に反省しつつ，確信を与えられたき事であると力説して挨拶を終る[34]。

湯浅が理事長をしていた時期，日本の教育行政は中央集権化していった。1958年，学習指導要領が改訂されて，それまでは試案だったものが「法的拘束力」を持つものとして全国の教育機関はその内容に準じなければならなくなった。また，道徳の時間特設に見られる道徳教育の強調や，系統学習を重視した科学教育の重点化が進み，教育課程の画一化が進んだ。そのような中で，関東地区では1955年に数学科研究会や社会科研究会，宗教教育分科会，西南地区でもホーム・ルームや社会科に関する話し合いを同じく1955年にスタートさせている。道徳の時間特設をめぐっても，道徳教育研究委員会が発足し，キリスト教学校における宗教教育と道徳教育との関連性について議論が交わされた。

湯浅は「一九五八年の回顧」(『キリスト教学校教育』第19号（通算113号，1959年１月１日付）の中で，以下のように述べている。

> キリスト教主義の諸学校はいずれも飽くまで学校であって，その第一使命は教育そのもの（中略）しかし，その教育の主題である人間形成の問題は単にカリキュラムや設備や人事によって解決されるものではなく，結局は宗教にもとづく人間観や世界観を基盤としなければ，その本質的な解決は不可能である。（中略）本年はわが国教育界にとって重要にして深刻な問題が提起せられたことであった。曰く勤務評定，曰く道徳教育，曰く短大改廃（中略）この様な現実に直面して，同盟は果たして如何なる態度をとるべきか，また如何なる具体的対策を提唱すべきであろうか。

このように，キリスト教による人間形成，宗教に基づく人間観や世界観を基盤とした教育が行われなければならないと考える一方で，様々な

社会変化や要請に対し，教育同盟としてどのような態度や対策を示すべきか研究が必要であると主張していた。一方で教職員への勤務評定が強まり，道徳教育が実施されるようになり，教育委員会による教師への縛りが強くなった現状で，キリスト教学校としての教育の自由を模索するための，機構改革だったと考えられる。

このように，国の動きとしての教育課程改訂に対して，湯浅理事長時代にはキリスト教学校の立場から，活発に教科ごとの議論がされていた。

以上見てきたように，湯浅は積極的に教育同盟の機構改革を行い，単なる親睦ではなく教育課程や教育内容に関する研究交流を通じても，キリスト教教育の発展を促していたと言える。本節最後に，第48回総会（1960年5月，神戸女学院）初日開会式での理事長挨拶を以下紹介する。

> 我が国の教育の大切な一翼を担う責任を感ずる。50年の歩みのうちにそれが充分果たされて来たかを反省したい。同盟は最初は懇親を主としたが今は，一つの連合機関としての働きをしている。キリスト教主義教育者の見地から教育問題について権威ある発言がなされるべきであり，その裏付けとなる研究が必要である。我々ははたしてそれほどの権威ある発言をしたであろうか。我々の使命は三つある。即ち①日本人の道徳観の確立，これは中心の課題であり，精神教育に貢献する責任は大きい。②日本の民主化について期待されるものが大きい，何故なら人格の尊重，自由，正義，愛―という民主々義の基盤にある主張はキリスト教が最もよく主張出来るからである。③宇宙時代は人間の物の考え方，見方に国際的なものを要求している。その点に於て同盟は要求に応えるべきである。具体的には，入試・浪人等の問題に対して，我々キリスト教学校はどの様な態度をとっているか，又とるべきだと考えているだろうか。又教育制度に対しても，どれ丈権威ある発言をしうるか，又，神社問題に対して如何？　この同盟が同労者の交りを深めると共に教育界に

権威ある発言をするものへと成長したい。この新しい半世紀にあたり，展望をもって歩みたい。「天の父の全きが如く汝らも全かれ」のみ言の如く，謙虚に又真摯に望みたい[35]。

教育同盟創立50年を迎えた節目に，湯浅は盛んにキリスト教主義教育者たちが「権威ある発言」をする必要性を訴えている。ここは，戦前国家へ従順にならざるを得なかったキリスト教学校の反省を踏まえているのではないか。そして権威を高めるために，教育同盟において「権威の裏付けとなる研究」がなされるべきだ。中でも①道徳性の確立・精神教育への貢献，②民主化を支える諸価値浸透への貢献，③宇宙時代に求められる国際的視野への応答，の3点へのキリスト教教育の責任は大きいと述べている。ここから，湯浅の目指すキリスト教教育は，人間存在の土台となる精神を感化し，民主的諸価値の実現に貢献し，国際的視野を育成することに力点が置かれていたことが分かる。一方で，いわゆる教会的な宗教教育は念頭に置かれていないと思われる。

湯浅八郎は，同志社，ICU，新島学園といった個別のキリスト教学校だけでなく，キリスト教学校全体の連携と発展を視野に入れて，発言し活動していた。そこには，戦前からの彼の思想である自由や国際性が貫かれていたのであった。

5. 湯浅の聖書観，神観，人間観

最後に，湯浅八郎は聖書をどのように捉えていたのだろうか。新島学園の創立30周年記念講演で[36]，聖書について，次のように語っている。

皆様が「聖書」についてどのようなお考えを持っていらっしゃるか存じませんが，私は宇宙最大の文献であると受け止めているわけであります。（中略）

（1300以上の言語に翻訳されているのは）「聖書」の中に，人間として一番大切なことが示されている。神の言葉，宇宙の真理，こうしたものがなければこのようなことはあり得ないと思います。新島学園はこの「聖書」に基づいてその教育事業を進めているのである。「聖書」の中には我々が必要とする根本的な理念が明確に示されています。

では，聖書の示す根本的理念とは何か。それは，湯浅の神観，人間観として表現されている。

湯浅は「生命は最初は原始的な生物としてだんだん植物・動物として分かれ，それが進化を重ねて今日見るような自然界ができ，生物の世界ができている。人間もその中の一つの生物です」と進化論的な説明をしている一方で，次のようにも述べている。

その「聖書」に一番最初に書いてあることが何であるか。皆さんご承知のように『創世記』第一章，第一節「神は初めに天と地を造り給えり」と書いてある。これが宇宙のどうして出来たかという，一番明確なそうして一番確かな解説です。私はそう受け止める。しかもその『創世記』の第一章の中に人間はどうしてできたということも記されている。第一章の26節になりますと神が人間を造ろうとお考えになったと示されている。ただ人間を造るばかりでなく，どのような人間を造ろうとお考えになったかということも示されている。神の如き人間，神ご自身が自分のような性格を持った人間を造ろうとお考えになったと書いてあります。人間は神の如き存在である。こう言って私は間違いないと思いますが，間違っているでしょうか。

宇宙は神によって創造され，人間は神に似せて造られた。「人間は単なる生物ではないので，神の摂理によって選ばれたる生物」ということになる。しかし，人間はそれだけの性質を持っているのではない。「宇

宙は神の支配したもうた所，その神は人間を自分と同じような神の如き本質を備えたものとして造りたもうた存在」である反面，「悪魔の如き本質を持っている」存在とも語っている。2000年前のユダヤ人が「この男（イエス）だけは許せないと言って十字架にかけろと言う」，それは現代でも同じである。「今我々が大事だと思っているような人間観，価値観そのすべてのものに挑戦するような意見を述べるような者は社会を乱す者だと言って，再びイエスを十字架にかけないという保証はありません。」だから「本当に正しい人間観は，人間は神によって造られた。そうして宇宙以上の重みをもつ存在であるということを理解しなければならない」，と力強く訴えた。

その上で，教育の根本とは聖書に基づく人間観，すなわち「それぞれは神によって結ばれなければならない。そしてそれは互いに協力する，助け合う，理解し合う，許し合う人間でなければならないことを教える。私はこのようなことが明日の日本の責任をとる青少年に教えられることが，本当の意味において教育であるというふうに思います」と結論づけている。湯浅にとって「神性が支配するか，悪魔が支配するか」によって，全世界は左右されるものと考えられていた。

これが，湯浅の言うところの聖書観，神観，人間観である。創造主なる神と結びつき，聖書を土台とした人間観によって教育を行うことが，キリスト教教育だと考えていた。その言説の別の特徴として，十字架による罪の救いについては余り強調されていないことは指摘しておきたい。

おわりに

湯浅八郎は，1946年に帰国して以来，戦後の活動拠点は一貫してキリスト教学校だった。同志社，ICU，新島学園の教育と経営にかかわる

一方，教育同盟理事長を５年間半務め，全国のキリスト教学校の連携協力体制を強化して，全国的視野に立ってキリスト教教育の発展に尽くした。

湯浅が一貫して掲げ続けた教育理念は要約すれば，「民主」「平和」「国際主義」「教育の土台としてのキリスト教」であろう。

本稿冒頭に掲げた短文の後段「善に潔められ　美に恵まれ　真に培われた一生を　神と人とに捧げつくす所に幸福がある。」を本稿の内容に照らし合わせるとすれば，湯浅の追求し続けた上記の理念はいずれも善であり，それを実現することが美しいことと考えられる。また，聖書の語る真理に培われて，一生を神と人に捧げよう，それこそが幸福である，というのが帰国直後の湯浅の意気込みであり，その実現を目指した人生だったのではなかろうか。

晩年，87歳の時の文章に，「宗際化の提唱」（1977年５月11日）が残っている[37]。「宗際化」は英語でInterreligious cooperationと表されている。各宗教の枠を超えた協力体制について訴えた内容で，「諸宗教がそれぞれ独自の見解信条を堅持しながら相互に謙虚に冷厳にそれぞれの実態を検討批判しその深化真化に協力相互して全人数の救済という根源的使命の達成に協力精進すべきである」と述べられている。この主張はキリスト教そのものの枠は壊すことなく，他宗教とも協力して全人類の救済に協力することを意図していた。国際主義と言っても国籍や人種の枠そのものをなくすという発想には立たなかったと同様に[38]，宗教についても固有性は保たれていたと考えられる。その点，同じくキリスト教の背景を持って晩年に帰一思想という全ての宗教や道徳が１つになるという発想に到達した成瀬仁蔵とは異なっていると言えるだろうが[39]，宗教多元主義の問題については，新たに検討すべきである。

夫人の湯浅清子が1972年４月に永眠後，八郎は1981年８月，自宅で

逝去した。享年91歳。

本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「日本対外学術文化交流における戦前と戦後の連続性に関する歴史的研究」（課題番号19K02514）による研究成果の一部である。

注

（1） 辻直人「湯浅八郎と基督教教育同盟会―キリスト教教育をめぐって―」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第52号，2020年。

（2）「新島学園五〇年の歩み」編集委員会『新島学園五〇年の歩み』62頁。

（3）『新島学園五〇年の歩み』51頁。

（4） NHK北米中米向放送のための原稿，1974年7月3日，同志社社史資料センター所蔵。

（5） 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想　湯浅八郎の日本とアメリカ』YMCA出版，1977年，71頁。

（6） 同志社大学アメリカ研究所編前掲書，72頁。

（7） 上野直蔵編『同志社百年史』通史篇二，同志社，1979年，1290頁。

（8） 上野前掲書，1290頁。

（9） 上野前掲書，1293-1924頁。

（10） *Young People*, Vol.68 No.49, December 5 1948,「湯浅八郎文書（シーベリー関係）」同志社社史資料センター所蔵。

（11） 上野前掲書，1294頁，1314頁。

（12） 昭和24年6月29日付同志社総長湯浅八郎，湯浅清子よりシーベリー送別会の案内文，「湯浅八郎文書（シーベリー関係）」同志社社史資料センター所蔵。

（13） 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想　湯浅八郎の日本とアメリカ』YMCA出版，73頁。

（14） 上野前掲書1324頁。

（15） 上野前掲書1315-1316頁。

（16） キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会『キリスト教学校教育同盟百年史』教文館，2012年，43-45頁，83-87頁。大西晴樹『キリスト教学校教育史

話　宣教師の種蒔きから成長した教育共同体』教文館，2015年，113-152頁。
(17)　『教育同盟百年史』85頁。
(18)　『教育同盟百年史』83頁。
(19)　『教育同盟百年史』87頁。
(20)　辻直人「戦時下における湯浅八郎のアメリカ滞在の実態」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第53号，2021年，196-197頁。
(21)　C.W.アイグルハート『国際基督教大学創立史』国際基督教大学，1990年，26頁。
(22)　武田清子『未来をきり拓く大学―国際基督教大学五十年の理念と軌跡』国際基督教大学出版局，2000年，27頁。アイグルハート前掲書34-35頁。
(23)　武田前掲書，27頁。アイグルハート35頁。
(24)　湯浅八郎「この一年を顧て」，初出は『THE ICU』1954年9月，引用は湯浅八郎『若者に幻を』国際基督教大学同窓会，1981年，262頁。
(25)　湯浅前掲書，261頁。
(26)　武田前掲書，131頁。
(27)　「新島学園の過去・現在・未来　新島学園創立五〇周年記念座談会」『新島学園五〇年の歩み』17-18頁。
(28)　湯浅正次「新島学園女子短期大学開学式（1983年5月10日）挨拶及び経過報告」『新島学園四〇年の歩み』133頁。
(29)　『新島学園五〇年の歩み』64-65頁。
(30)　上野前掲書，1097頁。
(31)　湯浅八郎「年頭所感」，『基督教教育新聞』第84号，1956年1月発行。
(32)　『基督教学校教育同盟総会記録　乃昭和33年至昭和41年（一）』教育同盟所蔵，98頁。
(33)　湯浅八郎「広報委員会の発足」，『基督教教育新聞』第94号，1957年2月発行。
(34)　『基督教学校教育同盟総会記録　乃昭和33年至昭和41年（一）』教育同盟所蔵，3頁。
(35)　『基督教学校教育同盟総会記録　乃昭和33年至昭和41年（一）』教育同盟所蔵，65頁。
(36)　湯浅八郎「創立30周年記念講演」，新島学園四〇年の歩み作成委員会『新島学園四〇年の歩み』1988年，130-131頁。

(37)　『いずみ』77年6月号のための原稿，同志社社史資料センター所蔵。
(38)　辻直人「戦時下における湯浅八郎のアメリカ滞在の実態」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第53号，2021年，205-206頁参照。
(39)　辻直人「成瀬仁蔵の帰一思想―その形成過程および米国への発信―」，見城悌治編著『帰一協会の挑戦と渋沢栄一　グローバル時代の「普遍」を目指して』ミネルヴァ書房，2018年。

参考文献

武田清子『湯浅八郎と二十世紀』教文館，2005年。
武田清子『未来をきり拓く大学―国際基督教大学五十年の理念と軌跡―』国際基督教大学出版局，2000年。
湯浅八郎『若者に幻を』国際基督教大学同窓会，1981年。
C.W.アイグルハート『国際基督教大学創立史―明日の大学へのヴィジョン（1945―63年）』国際基督教大学，1990年。
上野直蔵編『同志社百年史』同志社，1979年。
同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想　湯浅八郎の日本とアメリカ』YMCA出版，1977年。
新島学園四〇年の歩み作成委員会『新島学園四〇年の歩み』新島学園，1988年。
「新島学園五〇年の歩み」編集委員会『新島学園五〇年の歩み』新島学園，1997年。
辻直人「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響―イリノイ大学留学経験を中心に―」，立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』，2018年。
辻直人「湯浅八郎と基督教教育同盟会―キリスト教教育をめぐって―」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第52号，2000年。
辻直人「戦時下における湯浅八郎のアメリカ滞在の実態」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第53号，2001年。
辻直人「『道徳』特設にたいするキリスト教主義学校の対応―『キリスト教学校教育』を手がかりに―」『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』第2号，2004年。
辻直人「1950年代後半教育課程改訂への教育同盟の対応」『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』第6号，2008年。